何事もなくて夜は明けた。窓を開けば山の上には二十日程の有明月が研出されたやうに照らしてゐて、頂上にもまだ日はさゝぬ。曉の風冷やかに何とも云へぬよい心地である。澤に下りて清き流れに顏を洗ひ、さて仕度もそこ〳〵草鞋をかへて出發した。

（華）昨夜の曲者は夜中再擧を圖つて美事跳付られたそうな、女客は恐ろしがつて今日出發との話である。

（默）此事件が氣にかゝるかして、華秋は今朝よほど盆鎗してゐた。宿を出てから一丁も往て急に引返したから、何かと思つたら三脚を忘れたのであつた。

一里程下つて右に溪流をわたり、二十丁程で赤城社の前へ出た。此邊は見るべき景色もなく、たゞ野菊梅鉢草などが美しく咲いてゐるばかり。

（默）前にゆく馬方に『藥は入らぬか』と華秋がきいたら、吾々を眞個の藥屋と思つたか『ナニ入りません』と眞面目に氣の毒そうに斷つてゐた。

大胡の手前で茶店と思つて酒屋へ入つた、『宅では茶はありません』と不景氣な若者に斷はられ、『おちやけ斗りですか』と口を滑らせたのは默念である。

大胡は折から市日でもあるか一寸賑やかであつた。上泉で晝休み、こゝで辨當を開いたが、湯の澤の番公氣を利した積りで、むすびの中へ佃煮を握り込んだため生臭くつて口へ入れられぬ詮方なしに少し餡の味の變つた團子を食つて晝を濟ませた。

汽車の時間に間のあるため三住で赤城と榛名のスケッチをやつた。街道筋で見物も多く中々うるさい。

（默）僕の繪は山火事の如く、華秋の空は夕陽になつた。汀鷺は二枚かくといふて膝の上で水貼をやつてゐたが、是も恐らく出來損いであらう。

前橋四時發の汽車に乘つた。吾等の踏破した赤城山は、夕暮の色に籠められて漸く朧になつてゆく。鮮に見ゆるは西の空なる霄の明星、深谷あたりで日は全く暮れた。

（華）大宮でいろ〳〵御馳走を買つた。それは寒いの罰金を出し合つたので、汀鷺先生大枚三十錢は近頃珍らしいとである。

華秋とは赤羽に、默念とは目白で別れて、家へ歸つたのが夜の九時、こゝに目出度赤城の旅行を終つたのである。

（完）

* * * * * * *

○赤城駒ヶ嶽の紅葉の石版は製版困難で硬くなつたのは遺憾である

○小沼の岸は稍趣きを得た

○赤城山遠望は次項スケッチの說明にある通り多少原圖と相違の點がある